

吉野山の桜

藤井雅人

渴えた腕のような枝を支えながら

木々は待っていた その時を

なにかが湧きあがりつつあった

ひそかにめぐる 地底の水の廻廊から

それは ただの一瞬

有限が無限に逢うのは いつも一刹那

太虚へ駆けのぼるいのちの過剰が

山を埋めつくす 桜花のすがたで

無限と斬りむすぶいのちを眺めながら

ひとはわらい そして泣く

ひとの感受の容れ物は あまりに小さく

無限は 哄笑か号泣となって

そこからあふれ出る

喜びも嘆きも のみこまれる

開花と落花の 慌しい宴のなかに

そして ひととはまた待ちうける

永劫をわたる 桜色の大河が

また山に浮かびあがる時を